

社会学研究 第一〇〇号 東北社会学研究会 二〇一七年 九月

## 「日々生きられる宗教」としてのイスラーム

——日本人ムスリム女性の事例から——

安達 智史

本稿は、日本人ムスリム女性のライフストーリーの聞き取りを通じて、彼女たちがどのように日本社会においてムスリムであることを実践し、アイデンティティや社会関係と関わる潜在的コンフリクトを回避しているのかという点を明らかにすることで、「日々生きられる宗教」としてのイスラームのあり方を描くことを目的としている。分析の結果、彼女たちは、与えられた制約のなかで所与の資源・情報・関係を駆使しながら、「日本人ムスリム女性」を日々実践していることが明らかとなった。その姿は、「スカーフ」に表象／矮小化される日本人ムスリム女性のイメージとは程遠く、また「イスラーム」と冠される概念の外延の柔軟さと奥行きを示すものとなっている。

「キーワード」 日本人ムスリム女性 日々生きられる宗教 戦術

## 一 はじめに

アイデンティティは「状態」ではなく「過程」であり、「学習」されるものではなく「更新・上書き」されるものである。こうした見方は、社会学研究の常識となり久しい (Hall 1992)。それは、現代の非イスラーム社会に生きるムスリムにおいても同様に妥当なことである。かつて非イスラーム社会のムスリムは「二つの文化の間」にあり、それによりアイデンティティが引き裂かれているという言説が存在した。だが、現代の数多くのムスリム研究は、そのような見方が時代遅れであることを証明している (Knott and Khokher 1993)。むしろ彼女／彼らは、多文化的環境のなかでアイデンティティを重層化させることで、信仰を維持しつつも、近代的システムに適応しているのである。

だが、そのことはまた、日本社会に生きるムスリムにおいても同じように当てはまるものだろうか。社会あるいはコミュニティからの支援を欠く日本人ムスリムは、どのようにアイデンティティの危機を克服・回避しているのだろうか。とりわけ、異なるジェンダー規範の間に立たされる女性たちは、非イスラーム的空間のなかでいかにその宗教的義務と向き合っているのだろうか。本稿はこうした疑問に答えるために、「日々生きられる宗教」(Dessing et al. eds. 2013) という視点から日本人ムスリム女性に関する調査データを分析し、非イスラーム社会のなかで課される期待や要請に応えるために、宗教がそれぞれの文脈のなかで位置づけ直され、実践／非実践される多様なあり方について検討をおこなう。

## 二 背景

日本においてイスラームは、近年、高い注目を浴びている。二〇〇一年のアメリカ同時多発テロ、そしてその後の過激主義組織に関する出来事が、日本でも日常的に報道されるようになったことがその原因である。それは一方で、イスラームへの否定的イメージを広げたが、他方で、その見慣れぬ宗教に触れる機会を人々に提供するものでもあった (Zehi 2008, pp.42-43)。

なかでも注目すべきは、一般の日本人ムスリムが、イスラームとの関係を自身の言葉を通じて語っている資料が増えているという点である。たとえば、日本人の一般信徒による改宗経験やイスラーム的生活に関する書籍が、相次いで出版されている (日本ムスリム協会青年部 二〇〇七・樋口 二〇〇七・飯森編 二〇一一)。また、ブログ、Facebook、YouTube などでは、多数の日本人ムスリムが、自らの経験を紹介しながら宗教的知識や信仰実践に関する情報提供をおこなっている。そのなかで、日本人ムスリムであることにつわる日々の疑問や悩みが共有され、宗教実践や生活をめぐる質問が日々とり交わされている。こうした語りから見えることは、日本人ムスリムたちが、宗教的権威 (ハイマーム) や学者 (ウラマー) が強調するような細かなルールや実践、あるいは神への恭順だけではなく、自身が生きる社会環境のなかで、どのように「ムスリムとして生きる」ことができるのか、という点に強い関心を寄せているということである。というのも、イスラームが社会にもコミュニティにも根ざしていない日本社会においてムスリムとして生きることは、多くの葛藤・妥協・交渉を要するものであるが、それをいかにイスラームの観点から正当化するかという点が、日本人ムスリムの抱える重要なテーマだからである。つまり、彼女／彼らにとってイスラームは、テキスト上で学ぶ「制度化された教義」ではなく、日々の生活のなかでおこなわれる、多様な「生きられた実践」として意味をもっているのである (Dessing et al. eds. 2013)。

生きられた実践としてイスラームは、特に女性改宗者にとって重要な意義を有している。イスラームには、いくつかの領域において明確なジェンダー役割が存在しており、女性は家庭において、そして男性は仕事においてより大きな責任を

課されている。また女性は、スカーフやヴェールの着用、公的場面における女男の社会的交流をめぐる規定に見られる、身体的な規制をより多く被る傾向にある。だが、こうした規定が葛藤なしに受け入れられるのは、イスラームが文化的に受容され、社会的に制度化されている空間においてのみである。高い教育を受け、労働に従事することが当然視され、またジェンダーに基づく空間的隔離が公式に制度化されていない日本に生きるムスリム女性にとって、「ムスリムとして生きる」とは自明なものではなく、葛藤や決断を常にともなうのである。

本稿が目指すのは、改宗者としての日本人ムスリム女性が、どのように日本社会においてムスリムであることを実践し、アイデンティティや社会関係と結びついた潜在的コンフリクトを回避しているのか、という点を明らかにすることにある。それにより、日々生きられる宗教としてのイスラームの外延の柔軟さと奥行きを描く。

### 三 分析枠組み

#### 1 先行研究

日本人ムスリム女性をめぐる研究は、過去二〇年間、世界的に蓄積されているムスリム女性研究の延長線上で考えられるべきである。

近年の世界的なイスラーム研究の動向は、移民、情報化、社会・経済的流動性といった構造的要因に目を向けながら、女性のイスラームや社会との関わりの変化に注目を与えている。エジプト、イラン、マレーシアなど中東やアジアを対象とした多数の人類学的研究は、一九八〇年代以降、イスラーム復興運動、経済政策と女性の社会的・空間的移动、そして情報化のなかで、女性が伝統的コミュニティから離れ、イスラームと自ら主体的な関係をもつことで、伝統的なジェンダー

規範への抵抗や社会への進出を実現していることを明らかにしている。とりわけ、学習グループへの参加が、ムスリム女性のエージェンシーを高め、女性たち自身による新たな社会的地位の創出に寄与していることが指摘されている (Turab 1996; Frisk 2009)。それから一〇年遅れ、西洋諸国でも、社会学やフェミニズム地理学の分野で、ムスリム女性をめぐる議論が活発化している (Haddad et al. 2006; McGinty 2013)。上記の人類学的研究との違いは、非イスラーム社会における移民第二、三世代が対象となっている点である。とりわけ近年のイスラーム過激主義の台頭を背景としたイスラモフォビックな言説が支配的になるなかで、移民第二、三世代のムスリム女性が、西欧的価値システムへの適応と信仰とをいかなる形で両立させているのかが焦点となっている。そこで明らかにされたのが、現代の若者ムスリムは、コミュニティを通じた宗教理解から距離を取り、「個人化」した形で自身の信仰と関係をもつことで、イスラームの純粋化——文化からの宗教の区別——をおこなっているという点である。それにより、イスラームを民主主義的に(再)定義することで、一般社会から与えられている否定的な評価を避けるとともに、コミュニティの伝統的なジェンダー規範への抵抗を示しているのである (安達 二〇一五)。

日本人ムスリム女性をめぐるほほ唯一の体系的な成果である工藤(二〇〇八)もまた、同様の枠組みに即したものとなっている。工藤は、一九九〇年代に実施されたインタビュー調査のなかで、在日パキスタン人の日本人妻である改宗ムスリム女性が、いかにしてムスリムとしてのアイデンティティや実践を受容し、また夫婦関係や夫の親族ネットワークと関わっているのかという点について分析をおこなった。その際、女性たちが参加するイスラームの学習会が着目され、そのなかで彼女たちが同じ境遇の仲間とともにイスラームの独自の理解を深めている姿が描写された。また、そのように再解釈されたイスラームの知識をもとに、日本人ムスリム女性は、夫やその家族との関係をめぐる交渉をおこなっている点が論じられた。そこで、学習会という、(夫やその親族から)自律的なジェンダー化された空間が、非イスラーム社会にお

いてムスリムであることを可能にする日本人女性たちのエージェンシーの源泉として位置づけられている。

## 2 分析枠組み——日々生きられる宗教

だが、日本人ムスリム女性のより広範な理解にとって、先行研究は十分なものではない。というのも、従来の研究は、イスラームの組織のなかで「もっとも活動的な」人々を対象にする傾向があるためである (Jaldrot 2011; Otterbeck 2013)。工藤(二〇〇八)は、学習会に参加するムスリム女性を事例としているが、そうした活動に定期的に参与する者は、決して多くはないのである。それは、本稿のフィールドである関西・東海のような、日本人による学習会が十分に整備されていない地域では特に当てはまる点である。したがって宗教的コミュニティやグループの活動に日常的に関与していない「脱組織化した」(Jaldrot 2011)ムスリム女性がどのように信仰やアイデンティティをめぐる問題に対応しているのかを論じることは重要である。また、工藤(二〇〇八)の事例は、比較的堅固な親族的ネットワークをもつパキスタン人の日本人妻に限定されており、そのなかで彼女たちは、信仰・労働・家庭生活を管理することが可能となる。だが、逆に言えば、そうしたネットワークを欠き、信仰・労働・家庭生活においてより自律性を有している／有さざるをえないムスリム女性が、十分に考慮に入れられない危険がある。

本稿はこうした課題に応えるために、「日々生きられる宗教」という枠組みを用いつつ、組織的な宗教活動に必ずしも参与していないムスリム女性の分析をおこなう。この概念は、エリートや「モデル」によって規定されがちな公的な宗教実践をめぐる言説がもつバイアスに対して、一般信徒の私的生活に潜む日々の交渉や妥協を描き出すための広範なパースペクティブを指している (Woodhead 2013)。

「日々生きられる宗教」という考え方は、フランスの哲学者ミッシェル・ド・セルトーの「戦術」概念に由来している (de Certeau 1980, 訳一九八七)。セルトーは、都市的空間における社会的弱者と考えられる人々 (ex 被植民地者、スラム住民) が、権力側から与えられたルールをその意図と異なる形で読み替え、自身の利害や関心に沿うように利用する姿を、「戦術」という用語で表現した。戦術は、周到に準備され、体系的に行使される力ではなく、むしろ日々の暮らしのなかで権力者や社会からその都度与えられる条件に合わせながら、「なんとかやっていく」「抵抗」のあり方を描くものである (de Certeau 1980, 訳一九八七、一〇二頁)。抵抗が有する意義は、外部から与えられたルールやシステムを転覆することではなく、それらを自身の利害や関心に合わせ作り変えることで、複数の価値およびシステムの接合や越境を可能にする点にある。

戦術概念は、マイノリティ研究において用いられており (浮ヶ谷 二〇〇四・川端 二〇一二)、近年では、現代の西欧におけるムスリムの宗教実践および社会統合の文脈のなかで活用されている (Dessing et al. eds. 2013)。後者の研究は、社会的に過大に表象されがちな組織化した宗教活動に従事するムスリムではなく、そうした組織的活動に必ずしも積極的に関与していないムスリムを対象にし、非イスラーム社会のさまざまな場面 (ex 職場、家族、友人との関係など) におけるムスリムであることの多様な実践を描くものである。そこで焦点が当てられているのは、「イスラームを日常生活に関連あるものに設える戦術的なやり方」(Jaldrot 2013, p. 30)であり、人々が日常／非日常／生活のなかで目の当たりする矛盾やアイデンティティの危機を、手元にある資源を用いながらなんとか「やりくりする (manage)」(Jaldrot 2013, p. 30) 姿である。このような日常生活に見出される戦術は、一連のムスリム研究において「日々生きられる宗教」として議論されていく (Jaldrot 2011; Dessing et al. eds. 2013)。

本稿は、この日々生きられる宗教という枠組みに基づき、組織化した信仰実践をおこなっていない日本人ムスリム女性による戦術に着目しながら、イスラームの多様なあり方について描いていく。

#### 四 調査概要・方法

本稿のデータは、二〇一六年一月から四月の間、関西および中部地方に在住する二二名の日本人ムスリム女性に対するライフストーリーの聞き取りをもとにしている。ライフストーリーに着目した理由は、女性ムスリムが駆使する戦術が、現在与えられている課題や社会的関係だけでなく、彼女たちの人生の積み重ねである志向・価値・性格に大きく規定されると考えられるからである (Jaldhott 2011)。調査は、関西を拠点とするイスラーム系の民間団体の協力のもとおこなわれた。同団体には、筆者が作成した調査協力依頼のチラシを配布してもらい、その後、応募者とのインタビューのセッティングをおこなってもらった。インタビューでは、ライフストーリーを基本としつつ、改宗・結婚・信仰実践 (ex ドレス・コードおよび食事) について聞き取りをおこなった。そこで、改宗・結婚・信仰実践がもたらす潜在的な葛藤や問題を、インフォーマントがどのように克服・回避しているのかという点を検討した。

インフォーマントの年齢は二二・五歳で、平均は三二・八歳であり、大半が二〇、三〇代である。父親がイスラーム圏からの移民である日本人ポーン・ムスリムが二名おり、残りの一九名は、両親がともにネイティブの日本人である。ムスリム男性と結婚経験があるのは一五名と多数を占めているが、結婚が改宗の原因となった者は一〇名であり、ポーン・ムスリム二名を除いた九名は結婚を契機としない改宗者である。夫の出身地域は多様であり、日本、アジア、中東、北アフリカ、ヨーロッパと多岐にわたっている。学歴は総じて高く、一三名が大学卒業資格をもち、五名が短大・専門学校資格の保有者ないし在学者である。それに対して、高校卒業以下は三名となっている。インタビュー時、仕事を有する者は一六名であり、現在仕事をしていない場合も、その多くが妊娠や個人的な事情により一時的に職を離れている者であった。このことは、ほとんどのインフォーマントが、世帯の家計にとつて主要な役割を果たしている点を示すものである。それ

は結婚している場合も同様であった。その理由として、インフォーマントの夫は、工藤 (二〇〇八) の研究とは異なり、親族ネットワークにおける労働力の一部としてではなく、結婚を契機に来日した者が多く、日本で十分な雇用を確保することが困難であることが挙げられる。このことは、彼女たちが社会生活や信仰実践をめぐってより自律的である／あらざるをえないことを意味している。というのも、彼女たちはイスラームの背景を有する夫の親族ネットワークに組み込まれておらず、また仕事に多くの時間を割かねばならないことから、組織化した宗教活動 (ex 学習サークル、モスクへの定期的訪問) に従事することが困難だからである。

本稿では、ミアサとエリの二人のインフォーマントに絞って分析をおこなう。この二人が選択されたのは、イスラームとの関わりが多様なあり方を描くという本稿の目的に合致するからである。事例に見られる具体的なイスラーム受容やその他者への提示をめぐる戦術はそれぞれユニークなものであり、他のインフォーマントを代表するものと必ずしもみなすことはできない。だが、それにもかかわらず両者は、インフォーマントが直面する共通した課題 (仕事、結婚、イスラーム実践の受容) に対する一定振幅のある対極的な事例となっていることから、本稿の目的に適していると考えられる。では、分析に入る前に、二人の背景について述べておく。両者はともに三〇代であり、五年以上のムスリムとしてのキャリアを有している。また、外国人ムスリムと婚姻関係をもつとともに、仕事をおこなっているという共通点もある。インタビューにおいて見られた二人の顕著な違いは、ミアサが、イスラームの教義自体へのコミットメントを強調する傾向にあるのに対して、エリは、それをもつばら夫との関係から説明している点である。この違いは、宗教的背景に加え、結婚を改宗の契機とするか (エリ) 否か (ミアサ) と関わっている。その意味で両者は、二つのタイプの日本人ムスリム女性による、非イスラーム社会への適応戦術を示す事例といえる。

## 五 事例Ⅰ ミアサ——教義へのコミットメントと労働へのこだわり

ミアサは改宗六年目の、仕事をもつ三〇代の既婚女性である。彼女は次の二つの点で、後のエリと異なっている。第一に、宗教心を背景としたイスラームの信仰へのコミットメントである。彼女は、「しっかりと」仏教を信仰する家庭で育ち、また小・中・高・大をミッシヨン・スクールで過ごしたこともあり、人生において宗教が身近にあった。両親の離婚、いじめ、鬱といった個人的な危機もまた、「宗教心」が育まれた一つの背景となっている。つまり、彼女にとって宗教は、世界および自身に安定性を与える「拠り所」として機能するものである。イスラームへの関心は、そうした宗教への志向の延長線上に位置づけられる。大学時代、イスラームの文化やアラビア語に触れ、卒業後、神様や宗教をめぐって「フラフラしていた」時期に、イスラームを改めて勉強した。そこで、イスラームが他の宗教より「合理的」であり、その教えがより「腑に落ち」る経験をする。それは、彼女のイスラームへの恭順が、教義への深いコミットメントに基づくものであることを示している。第二に、ミアサは「働くこと」に対する強いこだわりをもち、また現在の介護職に生きがいを見出していることから、結婚・出産後も仕事を継続することを選択している。この点は、以下で見るように、ムスリムとして生活するための（潜在的な）問題をめぐる彼女の語りが、仕事と関連するものに集中していることと結びついている。以下では、仕事と信仰の間の葛藤を調停する、ミアサの戦術を見ていく。

スカーフは、イスラームのシンボルであり、それゆえに非イスラーム社会においてしばしば軋轢をもたらす原因となるものである。スカーフは、ごく身近な親族以外の男性からの視線から女性を保護するため、多くのムスリムによって慣習的に着用されている。だが、その慣行は非イスラーム社会から理解が得られず、結果、ムスリム女性は公的空間から排除されるリスクを抱えている。実際、スカーフ着用は、ミアサが改宗を決意するための障害であった。彼女が従事する介護

職の現場では、スカーフ着用は認められておらず、また業務のため「腕をまくったり」「足を出し」たりする必要があることから、ミアサは、それが私的な部分を隠すべしというイスラームの教えに抵触する<sup>5)</sup>と考え、改宗を逡巡していた。

やっぱり、私、結構、改宗するからにはちゃんとしたというのがあって。でも、日本でヒジャブ「スカーフ」すると目立つし、仕事にも差し支えるし、……そうして、ずっと迷っていて、それですと「改宗を」延ばしていたんですけど。「」は筆者、以下同）

「ちゃんとした」という発言は、彼女の信仰に対する態度を表している。ミアサは、イスラームを信仰内容の面から理解・支持することから、その実践をめぐる妥協を耐え難いことと考えていた。そのことが、彼女の改宗をためらわせていたのである。

こうした問題を解消するためにミアサが利用したのが、宗教的専門家であった。偶然目にしたモスクのインターネット・サイトにあったメール・アドレスを通じて、スカーフ着用について相談をおこなった。そこでモスクの管理者から、「会社でルールがある」のであれば、スカーフを着用することよりも、会社のルールをまずは優先するべきであるとアドバイスを受けた。このイスラームの義務履行の延期をめぐるアドバイスは、彼女がムスリムになるための障害を「クリア」するために重要な要因であった。というのも、イスラームの専門家からの意見は、こうした妥協がイスラームの教義に由来するものであると考えられたからである。

「ちゃんとした」という言葉に表されるミアサの性格は、自身のライフスタイル（労働、社会活動への従事）と信仰との間に生じうる潜在的リスクに対して、前もって対処する戦術を選択させている。たとえば、彼女は改宗後、SNS

で知り合ったチュニジア人男性と関係を深め、国際結婚をすることになるが、その際、起こりうるさまざまな問題についてかなり入念に調査をおこなっている。仕事を生活の重要な一部として位置づけるミアサは、相手のムスリムが「すごく極端な偏った考え」をもち、「仕事もできないとか、そんなんざれたら困る」と感じていた。そのため、彼と実際に会う前にチュニジアについて念入りに調べ、それにより「日本と同じ」で「一夫一婦制」であり、「重婚される可能性」はなく、「割と西欧化も進んでいて、女性の権利もちゃんと」しており、「アラブ諸国のなかで、教育レベルの高い」ことから、結婚相手として「まあ、大丈夫かな」という判断をおこなった。その後も、SNS上の彼とのやりとりのなかで、宗教的立場、一連の過激主義者によるテロリズムへの態度、アジアやアフリカにおける「名誉殺人」といった慣行に対する考え方などに「探りを入れ」ている。

彼と出会ってから、性別役割意識・態度に関するチェックが密かに続けられた。

「家のことは、おまへの仕事だろ」とか言われたら嫌だけど。そのあたりも、主人と結婚する前に探りを入れて、一応、結構世代的に若いってのもあるんですが、「ちゃんと家のことは男もせなあかん」っていう考えがちゃんとあつたし、日本に来たときに、彼は名古屋で知り合いの所でホームステイさせてもらっていて、私、時々そこに行つてたんですね。そのとき、よく料理を作ってくれていて、とりあえず、「家事能力はあるな」って。包丁の扱いも慣れていたし、「ちゃんと料理は作れる人だな」って。で、過去の話を聞いて、向こうは留学を、ウクライナにしばらく留学をしていて、ドミトリーに暮らしたりとかで。まあ、それやったらある程度は自分のこともできるんやなって分かつたので、とりあえず家事であるとか、料理であるとか、生活能力があるかどうかをすごく探つたので。

このようにミアサは、相手が「極端な男尊女卑」的な人物ではないことを慎重に確認し、ムスリム男性との間の国際結婚で将来問題になるリスク(①)一夫多妻、家事の強要など)を、事前に、そしてしたたかに排除したのであつた。

仕事をめぐる葛藤は、職場においても見出される。すでに述べたように、ミアサは当初スカーフを着用していなかったが、あるモスクに礼拝を目的として参加するなかで、ムスリムとして「ちゃんとしたい」という気持ちが徐々に高まり、その結果、改宗から数ヶ月でスカーフを着用し始めた。だが、スカーフの着用は、生活の場面、特に職場では容易なことではなかった。実際、スカーフに対する利用者からの苦情があつたと上司に「嫌味」を言われることもあつた。

その際、彼女が用いた戦術が、「国際結婚」という理由づけであつた。ミアサは、次のように述べている。

私も結婚したので、実際は結婚前から改宗をしてるんですけど、まあ、国際結婚だから改宗したってことにしておいて、それで納得いつてるんで。

彼女は、国際結婚をした日本人ムスリム女性に対する社会的イメージ(②)夫への服従)を利用し、それを「言い訳」とすることで、職場において彼女のスカーフ着用を認めさせることを容易にしている。これは、独身時代、スカーフを着用する姿に対して、職場の利用者から「ご主人、外国の人なの」という質問を幾度となくされ、その際、それが自身の決断によることを理解されにくかつた経緯に基づいている。こうした言い訳は、職場である施設の利用者や利用者何かに文句を言われても、「ちょっと主人が反対しているので。ちょっと今、相談してるんですけど」とか言って、ちょっとのらりくらり」とかわすための格好の戦術となつている。

## 六 事例Ⅱ エリ——夫との関係としてのイスラーム

エリは、関西で自営業を営む三〇代であり、トルコ人男性との結婚を契機に改宗し、ムスリムとして八年のキャリアを有している。エリがミアサと異なるのは、「典型的な日本人」「無宗教」と自身で評するように、宗教と無縁に過ごしてきた点である。彼女は、「自分のことを無宗教と思っていたので、いろんな、客観的な立ち位置にいたかった」と述べるように、宗教というものを外から眺め評価する視点を有していた。こうした態度は、彼女のイスラームへのコミットメントが、信仰それ自体よりも、より外在的な要因と強く結びついていることを示すものとなっている。エリがムスリムになったのは、夫となる男性と結婚するためであった。彼女は、学生時代に家族とトルコを訪れたとき、現在の夫に「ナンパ」された。その後、彼の実家に何度か旅行し、関係を育み、最終的に結婚を通じてムスリムとなった。この点は、彼女にとってムスリムであることは、その実践や知識よりも、結婚を通じて夫との関係により深く規定されていることを示唆するものとなっている。実際、ムスリムであることの意味や困難は、夫との関係をめぐる彼女の語りのなかにとりわけ明確に見出される。

それを象徴するのが結婚である。彼女は、夫となるユセフが「めっちゃ男前」であり、彼と結婚したいという「不純な動機」が改宗の目的であったと告白している。

ユセフが、ムスリムにならない結婚してくれへんのですよ。で、私は、「じゃあ、もういいや。ユセフと結婚できるならムスリムになろう」。

だが当初、イスラームへの改宗に乗り気ではなかった。それは、「宗教心」を抱いたことがなく、イスラームを学んでも「アッラーの存在を肌で感じ」ることができなかったためである。

そうした彼女の改宗を決定づけたのは、「先生」と呼ぶ、近所のモスクで働いていた一人のトルコ人の存在であった。エリはモスクに定期的に通っていなかったが、機会があるごとにこの人物と話をおこない、日本語で助言を受けていた。

「どうやって、「イスラームを」やめればいいんですか」って聞いて、「これは信仰の問題だから、信じなくなったときは、やめたんと一緒ですよ」って言われて、「じゃあ」みたいな。

エリは、知識ある人物から、「気軽に」脱退することが可能であることを示唆され、退路を確保することで、改宗という重大な決断をおこなうことができたのである。

こうした宗教的知識やそれを提供するアドバイザーの存在は、エリの日々の生活の管理をめぐる夫との交渉にとって重要な資源となっている。たとえば彼女は、信仰に関して夫としばしば喧嘩になることがあるという。無信仰者であったエリにとって、神の存在を感じるのには難しいことである。ポーン・ムスリムである夫は、「エリ、なんで神様を信じないんだ」と尋ねるが、「どうやって、神様がおるっていう風に信じればいいの」という彼女からの問いかけにうまく答えることができない。また、彼は、しばしば「YouTubeでクルアーンを聞きながら、リラックスしながら寝る」ことがあり、彼女はそれを「押しつけてんのかな、私に」と感じ、フラストレーションを溜めたりしていた。そういうこともあり、夫はエリにクルアーンを読ませようとするが、「頭に入っていない」ことから、彼女はそれに乗り気ではなかった。こうした信仰をめぐる対立の緩衝材となったのが、モスクで出会った先輩の日本人ムスリム女性であった。この女性は、彼女の夫に



次のように述べたという。

「エリはまだムスリムになって一年や」と。「赤ちゃんと一緒にや」と。「分かる。赤ちゃんは離乳食が欲しいのに、ミルクが欲しいのに、ステーキあげてんのと一緒やで」って、そういう説明してくれて、「余計嫌いになるから、そんなんさせたらあかん」って言うてくれた。

彼女の助言により、夫はエリにクルアーンを読ませたり、信仰実践への適応を急かすことがなくなった。

インフォーマントの宗教的実践の受容は教義に対する首肯性の度合いに依存する傾向にあったが、それはいつも教義内の在的に与えられるとは限らなかった。むしろ、その教義から直接的に導出されるものではないいくつかの理由から、宗教的義務の履行が選択されることもある。たとえば、エリはラーメンが大好物であったが、その食材の一部である「豚肉」はイスラームの規定において禁じられている（ハラーム）。彼女は改宗にあたり、そうした食をめぐるライフスタイルの一部を放棄せざるをえなかったのであるが、それは彼女にとって大きなストレスであった。それに対して、次のような理由づけをおこなうことにより、エリはイスラームの食をめぐる実践を受容した。

もう、ラーメンとかも好きやったし。で、ユセフは「じゃあ、私はタバコをやめますので」って言うて、「じゃあ、私も、豚饅やめます」みたいな。そういう交換条件やったの。

このようにエリは、自身の食生活（＝豚饅やラーメン）の部分的放棄を、夫のタバコの放棄と交換することで納得させた

のである。つまり、夫に自身と同等の犠牲を払わせることで、自身のライフスタイルの一部の放棄を受け入れたのである。イスラームの諸実践と日本社会における生活の間の葛藤は、別のやり方で対処されることもある。たとえば、イスラームの読み替え、情報の統制、夫への配慮である。これらは、エリにおいて、ドレス・コードをめぐる実践と関わる事例に適用されている。

たとえば彼女は、スカーフを着用する者を「すごい」と評する一方で、自身スカーフを着用していない。それには、複数の理由が存在している。第一に、一旦スカーフをすると、それが当たり前と周りにみなされることで「脱げなくなる」ためである。第二に、「日本人のムスリムに関するイメージをチェンジしたいので、できるだけ普通でありたい」という理由からである。これは、ヘスカーフムスリム女性＝抑圧」という社会的表象に対する、彼女なりの抵抗を表すものである。そして第三に、日本でスカーフを着用することが、イスラームの本来の考え方に反することへの懸念のためである。最後の点は、次のように述べられている。

日本にいたるとね、スカーフをする意味って髪の毛がセクシーやからかな、と思うんですね。ほんで、人が見るから隠せ、なんですけど。日本におったら、スカーフをしている方が見られるじゃないですか。じゃあ、逆やなあと思っ

て。  
ここでエリは、スカーフ着用の義務を、男性の眼差しを避ける必要性の観点からとらえている。そして、日本という文脈ではそれが逆に関心を集めるといふ理由から、スカーフの未着用をむしろイスラームに則るものと考え、そのように積極的に選択しているのである。

スカーフに加えて、肌をさらすこともまた、エリにとって葛藤の原因であった。それは、一方で、日本人女性として夏場など肌を出すことが当たり前だと感じていたためであり、他方で、結婚以前、そしてその後しばらく芸能関係で仕事をしており、肌を出す機会があったためである。後者に関して、彼女が自営業を始める前にしばらく芸能関係の活動を続けていたのは、夫が日本語を話せず、仕事もなく、エリがその仕事をおこなう以外、「他に生きてく道が無かった」ためであった。そのためエリは、仕事内容を「夫には黙って」芸能活動を継続した。つまり、夫に対する情報の管理を通じて、彼女が引き受けるイスラーム実践の境界をコントロールすることで、彼とのムスリムとしての生活を守ったのである。<sup>10)</sup>

では、前者の理由、つまり夏場において肌を出すというライフスタイルをめぐる問題はどのように対処されたのであろうか。彼女は、スカーフを着用しない一方で、日常場面において肌をなるべく隠すことを選択した。それは、パートナーへの配慮が原因である。

あんまりユセフが、日本の女の子みんな、夏に足出してるのを、もうすごい不快な感じで見るんですよ。「気持ち悪いわ」みたいな感じやから。「不快にさせんやったら隠そう」みたいな。その、「セクシーやから隠そう」というよりも、「不快に感じる人もおるんやな」みたいな感じですよ。

興味深いのは、ここで彼女は、イスラームの教義に言及せず、純粹に「夫のため」という個人的理由を挙げている点である。つまり、彼女は、イスラームがもつ教義や義務へのコミットメントではなく、もっぱら夫との関係のなかでいくつかの宗教的実践を引き受けているのである。

## 七 考察

以上、ミアサとエリという異なるタイプのムスリム女性の事例を取り上げながら、いかにして日本人ムスリム女性が、非イスラーム社会のなかで、自身の望むライフスタイルと信仰とを両立させているのかを検討してきた。本節では、以上の議論が有する意義について論じる。

まず指摘しておかなければならないことは、本稿と工藤（二〇〇八）の研究は、背景・課題を共有しているという点である。どちらの研究も、「日本社会においてムスリムであること」をめぐる、改宗ムスリムとしての日本人女性が抱く葛藤とその解消法を明らかにすることを分析上の重要な課題としている。また、その際、女性たちがイスラームを自身の手で「再解釈し、『無理のない』宗教実践を創造する」（工藤 二〇〇八、二五五頁）やり方に焦点を当てている点も共通している。

だが、そうした宗教実践の構築をめぐる分析に際して、両者には重要な違いが存在している。工藤の研究は、学習会というジェンダー化した自律的な組織的空間が、日本人ムスリム女性たちの日々の葛藤の克服にもつ意義について強調している。そのなかで、一方でイスラームの知識の修得によって、他方で境遇を同じくする他のムスリム女性からの支援を通じて、彼女たちが自らの信仰のあり方や社会および家族との関わり方を模索する過程が描かれている。それに対して本稿は、そうした組織に積極的に関与していない女性の、より個人化した戦術や資源に注目している。そのため本研究は、イスラームの知識がもつ重要性を認めながらも、逆にそうした知識が彼女たちの直面する課題や志向に応じて選択的に取り入れられ、解釈される点をより強調した。それにより、学習会といった日常生活（＝仕事や家族）から独立した空間ではなく、日常空間のなかで、日本社会でムスリムとして生きること、あるいは日本人としてイスラームを実践することが有

する困難を克服する、日本人ムスリム女性の多様な試みを描くことができた。また、ライフストーリーの聞き取りにより、夫との関係や仕事に加え、育ってきた背景やそれに基づく個人の志向・価値・性格が、彼女たちのイスラーム理解やその実践の受容に影響を及ぼす可能性があることを、限定的ではあるが明らかにすることができた。

具体的に述べれば、たとえばミアサは、宗教的背景を基盤としたイスラームの教義へのコミットメントと、「ちゃんとしたい」という発言に表れるムスリムとしての一貫性に、深いこだわりを有している。そのため、信仰実践に関する妥協はより困難であった。その結果、彼女は、ライフスタイルと信仰との間で生じうる潜在的対立や葛藤を事前に排除する戦術をとることで、日本でムスリムであることの問題の芽を刈り取っている。また、「国際結婚」という方便を用いながら、ムスリムとしての実践を職場などで認めさせる柔軟さも有している。それに対して、エリにとつてイスラームの実践は、夫との関係のなかで規定されている。だが、それはボン・ムスリムである夫の教えへの一方的な恭順に帰結するものではない。むしろ彼女は、与えられた環境や夫との関係を、複数の資源(⑥)アドバイザー、解釈、情報)を通じてコントロールすることで、宗教的義務や実践を選択的に履行しているのである。そうした選択には、専門家の利用も含まれている。彼女たちは宗教的な専門家やアドバイザーの意見に頼っているが、それは権威により与えられたルールへの服従ではなく、むしろその選択的取り入れを意味している。彼女たちは、所与の生活状況やそこで直面する課題に応じて、イスラームをめぐる複数の言説や知識を選択し、取り入れているのである。このような多様な戦術の存在は、先行研究が見落としてきた点であり、また「日々生きられる宗教」という枠組みによって観察することができた重要な知見といえる。

ただ注意すべきは、彼女たちが駆使する教義に関わるそうした戦術(選択、読み替え、妥協)は、ムスリムであることを犠牲にするものではなく、むしろ逆に、それを可能にするためにおこなわれているという点である。イスラームの信仰や実践へのコミットメントはさまざまであったが、それでも彼女たちは、ムスリムとして生きていくことを決して否定し

てはいないのである。したがって、彼女たちが駆使する戦術は、日本においてムスリム女性として生きていくための不可欠な方法としてとらえることが肝要である。

## 八 おわりに

以上の事例が示したのは、手元にある資源を用いながら、これまで生きてきた日本社会と、新たに加入したイスラームの価値や実践の間の断絶を繕うことで、生活やアイデンティティの安定性を確保するため奮闘する女性たちの姿であった。彼女たちは、与えられた制約のなかで、所与の資源・情報・関係を利用しながら、「日本人ムスリム女性」を日々実践しているのである。その姿は、「スカーフ」に表象・矮小される日本人ムスリム女性のイメージとは程遠く、また「イスラーム」と冠される概念の外延の柔軟さと奥行きを示すものとなっている(Jeldtoft 2011)。彼女たちにとってイスラームは、宗教的権威や夫を通じて教化・内面化されるものではなく、また学習サークルなどを通じて体系的に構築されるものでもなく、与えられた環境のなかで、複数の資源や手段を動員して彼女たち自身の手で構築されるプリコラージュの産物なのである。逆に述べれば、イスラームは、こうした女性たちによって日々生きられることを通じて、非イスラーム社会や現代の複雑な環境のなかで存続可能となるのである。

### 注

- (1) こうした課題は、日本ムスリム協会名誉会長の樋口美作によつてはつきりと表明されている。彼は、イスラームを「二足のワラジ」、つまり神と自己との関係および社会と自己との関係としてとらえ、前者のみならず後者を重視することで、日本社会の慣行を尊重し、

他者と協調することの重要性を説いている(樋口 二〇〇七、二〇四―二二三頁)。

(2) それは夫との出会いがもつばら海外におけるもの、あるいはインターネットを介したものだからである。彼女たちの夫の多くは、来日以前に日本とコネクションを有しておらず、また日本語能力が十分ではないため、インフォーマントが世帯の主たる維持者となるケースが多数であった。この点は、日々の生活の管理における彼女たちの優位性に帰結している。

(3) 以下、インフォーマントおよびインタビュ어의なかで出てきている個人名は、特定を避けるためにすべて改変されている。

(4) 教義がもつ「認知的(cognitive)」側面―教義の論理的妥当性―への共感は、イスラームへの改宗者に特に見られる傾向である(Zabiri 2008; Kose 2010)。実際、宗教的背景をもっていたり、改宗以前に宗教に関心があったインフォーマントは、「三位一体」に基づくキリスト教の教義よりも、「神の唯一性」を強調するイスラームの方がより合理的であると考えている。

(5) 介護職で働く複数のインフォーマントは同様の葛藤を抱えていたが、その対応は異なっている。ある者は、「被りもの」が「衛生的ではない」という理由から職場でスカーフを着用せず、別の者は、夫から職場でスカーフを着用することを求められたが、それを拒否している。

(6) このように「日本人でありながら」ムスリムであることを『矛盾』と見る周囲の眼差し(工藤 二〇〇八、二四六頁)はありふれた経験であり、それに対して、「外国人の夫」を理由にイスラームの実践を正当化する方法は、インフォーマントが広く用いる戦術であった。

(7) むろん宗教的背景をもたないことは、必ずしもイスラームの教義や論理への傾倒を不可能にするわけではない。ただ、幼少の頃から何らかの形で宗教を身近に感じていた者は、イスラームの教義それ自体により強いコミットメントを抱く傾向にあった。

(8) エリは後に、イスラームに則ったラーメン屋と出会い、そこでラーメンを「泣きながら食べた」と述べている。これは、食生活の部分的放棄が、彼女にとってどれほど大きな事案であったのかを示すものである。

(9) スカーフ着用は、日本の文脈において視線を集めることから、イスラームの本来の意味を逆に損なう危険があるという説明は、スカーフを日常的に着用しないインフォーマントに好んで用いられる、イスラームの読み替え戦術であった。

(10) 夫に対して情報を統制するやり方は、外国人ムスリム男性と結婚したインフォーマントの間でありふれた戦術であった。たとえば、あるインフォーマントは、「こだわっていたらきりがない」ことから、食料が厳密にイスラームに則るものか否かを、常に夫に伝えるというわけではないと述べている。

## 文献

- 安達智史 二〇一五 「情報化時代における若者ムスリムの社会統合―イスラームの〈知識〉に着目して」『社会学評論』六六(三)、三四六―三六三頁。
- de Certeau, Michel 1980 *L'invention du quotidien, tome 1: Arts de faire*. Paris: Union Générale d'Éditions. (山田登世子訳 一九八七 『日常の実践のポイエティーク』国文社。)
- Dessing, Nathal, Nadia Jeldtoft, Jørgen Nielsen, and Linda Woodhead eds. 2013 *Everyday Lived Islam in Europe*. Farnham: Ashgate Publishing.
- Frisk, Sylvia 2009 *Submitting to God: Women and Islam in Urban Malaysia*. Seattle: University of Washington Press.
- Haddad, Yvonne, Jane Smith and Kathleen Moore 2006 *Muslim Women in America: The Challenge of Islamic Identity Today*. Oxford: Oxford University Press.
- Hall, Stuart 1992 *The Question of Cultural Identity*. Stuart Hall, David Held and Tony McGrew eds., *Modernity and Its Futures*. Cambridge: Polity Press, pp.273-325.

- 樋口美作 二〇〇七 『日本人ムスリムとして生きる』 佼成出版社。
- 飯森嘉助編 二〇一一 『イスラームと日本人』 国書刊行会。
- Jeldtoft, Nadia 2011 Lived Islam: Religious Identity with 'Non-Organized' Muslim Minorities. *Ethnic and Racial Studies*, 34(7), pp.1134-1151.
- 2013 The Hypervisibility of Islam. Nathal Delsing, Nadia Jeldtoft, Jørgen Nielsen, and Linda Woodhead eds. *Everyday Lived Islam in Europe*. Farnham: Ashgate Publishing, pp.23-38.
- 川端浩平 二〇一一 『二重の不可視化と日常的美観——非集住的環境へ生活する在日コリアンのファッションワークから』 『社会学評論』 六三(11) 二〇三—二一九頁。
- Knott, Kim and Sajida Khokher 1993 Religion and Ethnic Identity among Young Muslim Women in Bradford. *New Community*, 5, pp.99-108.
- Köse, Ali 2010 *Conversion to Islam: A Study of Native British Converts*. New York: Routledge.
- 工藤正子 二〇〇八 『越境の人類学——在日ムスリム移民の妻たち』 東京大学出版会。
- McGinty, Anna 2013 Emotional Geographies of Veiling: The Meanings of the Hijab for Five Palestinian American Muslim Women. *Gender, Place and Culture: A Journal of Feminist Geography*, 21(6), pp.683-700.
- 日本トスリム協会青年部 二〇〇七 『入信記』 日本トスリム協会。
- Otterbeck, Jonas 2013 Experiencing Islam: Narratives about Faith by Young Adult Muslims in Malmö and Copenhagen. Nathal Delsing, Nadia Jeldtoft, Jørgen Nielsen, and Linda Woodhead eds. *Everyday Lived Islam in Europe*. Farnham: Ashgate Publishing, pp.115-134.

Torab, Azam 1996 Piety as Gendered Agency: A Study of Jalaseh Ritual Discourse in an Urban Neighbourhood in Iran. *Journal of the*

*Royal Anthropological Institute*, 2(2), pp.235-252.

浮ヶ谷幸代 二〇〇四 『病氣ひまひ』と『病氣ひなご』を生きる。近藤英俊・浮ヶ谷幸代編『現代医療の民族史』 明石書店。

Woodhead, Linda 2013 Tactical and Strategic Religion. Nathal Delsing, Nadia Jeldtoft, Jørgen Nielsen, and Linda Woodhead eds.

*Everyday Lived Islam in Europe*. Farnham: Ashgate Publishing, pp.9-22.

Zebiri, Kate 2008 *British Muslim Converts: Choosing Alternative Lives*. Oxford: Onworld Book.

## 謝辞

本稿は、JSPS科研費一五H〇六七五一、一六K一七二五〇の支援による研究成果の一部である。

(あだち さとし・近畿大学総合社会学部)